

論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	古谷 龍人
学位論文名	Effects of age on postoperative oral function in older adults with oral squamous cell carcinoma and its cutoff values: a cross-sectional study	
学位論文審査委員	主査	日高 匡章
	副査	馬庭 壯吉
	副査	牧石 徹也



論文審査の結果の要旨

近年、免疫チェックポイント阻害薬や光免疫療法など治療選択肢の進歩により、口腔扁平上皮癌（OSCC）患者の生存率は改善しつつあるが、特に高齢患者では治療に伴う口腔機能低下と口腔機能障害が依然深刻であり、QOLや予後に影響を及ぼすことが懸念されている。日本が世界有数の超高齢社会であることを踏まえ、治療後の口腔機能における年齢の影響とそのカットオフ値を明らかにすることは、今後の個別化治療に重要である。本研究では、2019年9月から2023年3月までにNCCNガイドラインに準拠した治療を受けたOSCC患者102名（男性74名、女性28名、平均年齢69.6歳）を対象に、退院前に口腔内細菌数、口腔乾燥度、咬合力、舌圧、咀嚼機能、EAT-10の6項目を測定し、年齢との関連を横断的に解析した。ROC解析の結果、咬合力においては75歳がカットオフ値とされ、傾向スコア解析では75歳を超えると咬合力低下のオッズ比は4.32と有意に上昇した（ $P=0.01$ ）。また、咀嚼機能においても84歳を超えると有意な低下が示唆された。多変量解析では、年齢は原発部位や進行期、頸部郭清、再建術の有無などの治療要因とは独立して咬合力と咀嚼機能に影響を与えることが示され、特に歯の喪失や咀嚼筋群の加齢性萎縮が機能低下の一因と考えられた。さらに高齢患者では放射線治療による唾液腺機能低下が重なり、口腔内細菌数の増加とも有意な関連が認められた。

本研究は、治療時年齢75歳以上の患者では治療後の口腔機能障害リスクが約2～4倍に高まることを世界で初めて示し、咬合・咀嚼機能の早期からの補綴的介入や個別化したりハビリテーションの重要性を提言した点で学術的意義が大きい。ただし本研究は単施設・横断研究であり、地域的な高齢化特性や患者背景の異質性などの限界があるため、今後は多施設共同の前向きコホート研究により年齢カットオフ値の妥当性と機能予後の検証が求められる。本研究の新規知見は、高齢OSCC患者の治療方針決定において生存率のみならず機能面の「ソフトアウトカム」を重視し、QOL維持を図る新たなエビデンスとなり得るものと考えられる。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は口腔癌に対する手術後の口腔機能障害に年齢(75歳以上)が深く関わっていることを初めて示した。今後、口腔機能を保つための補綴的介入、個別化リハビリの重要性を示したこと、口腔機能維持が今後の予後に繋がる可能性を示した点で、患者予後改善へ向けた重要な研究である。関連知識も豊富で質疑応答も明確であり、学位授与に値する。
(主査 日高 匡章)

申請者は、口腔癌術後成績の評価において従前からの生存率だけでなく口腔機能が重要であることを提唱し、年齢と術後の口腔機能の関連について明らかにした。さらに術後の口腔機能障害に対する学際的な治療（多職種連携）によって術後患者のQOLを改善できる可能性を示した。高齢化が著しい島根県における口腔癌治療に対する講座の先進的、包括的な取り組みを示されており、学位授与にふさわしい内容であった。(副査 馬庭 壯吉)

申請者は、口腔癌手術後の口腔機能障害に対して年齢が深く関与していることを世界で初めて示した。あわせて、口腔機能の維持が予後改善に寄与し得る可能性を示し、補綴的介入や個別化されたりハビリテーションの重要性を提言した点において、臨床的・学術的意義の高い研究と評価される。申請者は関連分野の知識も豊富で、最終試験における質疑応答も明快かつ的確であった。以上より学位授与に値すると考える。(副査 牧石 徹也)

(備考) 要旨は、それぞれ400字程度とする。